ニコラス・ラヴ『イエス・キリストの尊い生涯の鏡』木曜日（2/3）第三十四章—第三十七章

田　口　まゆみ

Nicholas Love's *Mirror of the Blessed Life of Jesus Christ* : part 7.

TAGUCHI Mayumi

第三十四章　ラザロとその他二人の死者をよみがえらせたこと

[1] [N] われらが主イエス・キリストがこの世で働かれた数々の奇跡の中でも，ラザロの復活こそ，第一に称えられ，筆頭に挙げられるべきものです。それが最高の奇跡であったからばかりでなく，その奇跡にまつわる多くの注目すべき事柄とさまざまな神秘的なできごとのためで，これについては聖アウグスティヌスが，ヨハネによる福音書についての長い解説書で学問的に扱っています[2]。この論考についても部分的に触れますが，それよりも，われらが主イエスの恵みのままに，目的を達することができるように主がくださる知恵によって語ろうと思います。[n]

われらが主イエスが三人の死者をよみがえらせたことについてその福音書が記していることに関し，まず初めの二件については本書で特に触れてこなかったので，前述のアウグスティヌスにならい，今ここで簡単に解説しておくことが効果的であると思われます。

まずわたしたちが理解し心に留めておかなければならないことは，われらが主イエスが人として行われた行いは，従順にせよ，清貧にせよ，忍耐にせよ，その他の美徳にせよ，わたしたちが学ぶべき手本であるという点です。すなわち神として行われたこれらの奇跡においては，イエスがなされたことをまねようなどと願ってはならないということです。この奇跡によってイエスを全能の神として称え，さらに，その時肉的に肉体に対して行わ

平成17年10月31日　原稿受理
大阪産業大学　人間環境学部

1）原注：N

2）Augustine, *In Johannis Evangelium Tractatus CXXIV*, PL 35：1379-1976, Tractatus XLIX.（アウグスティヌスからの引用についての注は，Sargentから掲載）

れたそれらの奇跡が，今，繰り返し霊的に人の魂に対して行われるという，その奇跡の霊的な意味について理解しようと強く望むべきです。ですから，聖アウグスティヌスが述べているように[3]，われらが主イエスが肉的によみがえらせた三人の死者の肉体は，三様の死んだ魂を表しており，イエスはこれらを特別な恩寵により永遠の命へと日々よみがえらせておられるのです。福音書に記述されているように，イエスはまず，家で亡くなった会堂長の娘をよみがえらせましたが[4]，これは死に至る罪に心で応じたが，実際には行わなかった場合を示しています。またイエスは，町の門の外の棺の中のやもめの息子をよみがえらせましたが[5]，これは実行された死の罪を示しています。そしてイエスがよみがえらせた三人目の死者がラザロでしたが[6]，彼は埋葬され，死後四日を経ていました。これは常習的な死の罪を表しています。もし，罪は魂の死であるということを肝に銘じ，理解するならば，魂は罪によってこれら三様に霊的に殺害されるということが分かるでしょう。まず，神に禁じられていることを行うことに心で応じる場合，罪は心の中だけのことで，外的には罪を行っていません。たとえば「姦淫するな」と命じられていますが，われらが主は福音書で，男が女を肉体的な交渉を持ちたいと思ってみだらな思いで見，心の中でこれを良しとした場合，実際に実行しなかったとしても彼は心の中でその女を犯したとみなされるという例えを挙げておられます[7]。このとき彼の魂は心で罪に応じたことによって霊的に殺されたのであり，神の目には死んでいるのです。

[8]このような魂の死が，われらが主イエスが家でよみがえらせた第一の死体，前述の，教会(シナゴグ)の長，あるいは会堂長の娘によって理解されます。

[9]この人について，福音書にはこう記述されています。彼はわれらが主イエスのもとに来て，どうぞ家に来て病気で寝ている娘を治してくださるようにと願いました。主は，心から主に願う者に対しては常に大いなる恩寵と限りない善を喜んで施し，助け，癒してくださいますから，会堂長と一緒に彼の家に向かわれました。するとこの会堂長のもとへ，娘が亡くなったので，先生，すなわちイエスを無駄に煩わせることがないようにと言伝(ことづて)が届きました。彼らはイエスに病人を癒す力があることは信じていたけれど，死人をよみが

3）Augustine, *In Johannis Evangelium Tractatus* XLIX, PL 35：1747-48.
4）ルカ, 8：41-42, 49-55; マタイ, 9：18-18, 23-25, マルコ, 5：23-24, 35-42.
5）ルカ, 7：11-17.
6）ヨハネ, 11：38-44.
7）マタイ, 5：28.
8）原注：Of the first dede body.
9）原注：historia de filia archisinagogi Matthei ix Marci v Luce viij.（会堂長の娘の話）；ルカ，8：40-42，49-56.

えらせることができるとは思っていなかったからでした。しかしわれらが主イエスは，彼らの信心の弱さや主の恩寵を軽んじたことをお怒りなることはなく，父親に向かって「恐れることはない。ただ信じなさい」(ルカ,8：50) と告げられたのでした。主がその家に着いてみると，その地の慣習に従い，大勢の人が泣き悲しみ，弔いの楽が奏でられ，その他葬儀のための準備がなされていました。イエスは言われました。「泣くな。娘は死んだのではない。眠っているのだ。」人々は主をあざ笑いました（ルカ，8：52-53)。主のお言葉の意味が分からなかったのです。娘は彼らにとっては死んでいたけれど，これをよみがえらせ，生きさせる力をお持ちの主にとっては，娘は眠っているに過ぎなかったのです。そこで，娘の父母と，三人の使徒ペトロ，ヤコブ，ヨハネ以外の全ての人を家の外に出して（ルカ，8：51)，われらが主イエスは，娘に「起きなさい」とお命じになりました。すると娘はすぐに死からよみがえって立ち上がり，その後食べ物も食べて（ルカ，8：54-55)，元気になったのです。

[10] 以上が福音書の字義通りの話です。この話から，霊的に次のように理解することができます。まず，われらが主は，そのとき父親の祈りと信心で娘を肉体的によみがえらせたように，今，罪によって死んだ魂を，聖人たちの説教と祈り，そして聖教会の信仰によって，たびたびよみがえらせてくださいます。イエスが，人々の不信心や嘲笑にもかかわらず，主の恩寵を願った人を救うことをおやめにならなかったように，この世の人も，自分をあざけり，非難する者があろうとも，他の人の益になることをやめてはなりません。すなわち聖教会に属する人は，それが彼らの仕事であるならば，死んだ魂を霊的な命によみがえらせるために神の言葉を説くことをやめてはならないのです。聖アウグスティヌスが述べているように，死の罪に心で応じたために霊的に死んだ人が，神の言葉を語られるのを聞くことで，恩寵により，われらが主に「起きなさい」と言われるのを聞いたかのように，心でその罪を悔いるということが日々起こっているからです。その人は，まだ家にいた，すなわちその罪を実行することによって家の外に運ばれる前だったので，そうして悔悟により，霊的死から生へとよみがえらせられるのです。これが死の罪の第一のありようで，恩寵によってよみがえることが最も簡単な場合です。それは上に述べたように家の中でイエスによってよみがえらせられた最初の死者によって証明されています。

しかしながら，この思っただけという死の罪も，特にその罪が高慢や嫉妬といった霊的なものである場合，長い間これに染まると大変危険なものになります。聖グレゴリウスが述べているように[11]，それは時に，神の目には，より重大な罪なのです。たとえば心の中

10）原注：spiritualis intellectus

11）原注：Moralium 33°; Gregory, *Moralia in Job*, PL 76：666-67.

でつくづくと自分が偉いと思うことは姦淫よりも罪が重く，しかも後者すなわち姦淫は日々激しく非難されるのに対しもう一方はめったに，あるいはほとんど責められることがないので，多くの人がここで思い誤るのです。しかし，この点についてはこれくらいにしましょう。

死者をよみがえらせた第二の話は，聖ルカによる福音書に記されています[12)]。われらが主イエスがナインという町に弟子たちや大勢の群集と一緒に行かれたとき，町の門のところで，ある死者が棺で担(かつ)ぎ出されるところに出会われました。それは死者と一緒に来たあるやもめの一人息子で，大勢の町の人がそばに付き添っていました。主はこのやもめが激しく嘆くのを見て憐れまれ，限りない慈悲の心から，「もう泣かなくともよい」と言われました（ルカ,7：13)。そして，近づいて棺に手を触れられると，棺を担いでいた人たちは立ち止まりました。イエスは死者にこのように言われました。「若者よ，あなたに言う。起きなさい」（ルカ,7：14)。すると，死人はすぐさま生き返って，自分の足で歩き，ものを言い始めたのです。そうしてイエスは息子をその母親にお返しになりました。これがこの福音書にある話です。

ああ主なるイエスよ，あなたが罪深い人々に示された憐れみはなんと大きいことでしょう。その死者が埋葬のために運び出されるところを，請い願われもしないのに，ただ御心の限りない善と慈愛に動かされ，よみがえらせられました。ちょうどそのように，あなたは，姦淫，大食といった肉的な，また霊的な重罪を犯したために霊的に死んだ者たちを日々よみがえらせられます。祈りで請われることがなくても，その他必要な方法によって請い求められることがなくても，しばしば，主は恩寵をお与えになり，そのことで罪びとたちは悔悟の心を起こし，罪深い行いをやめ，そうして聖教会の法が定めるところに従って懺悔と償罪を行うことによって，罪を実際に犯したことで死んでいた霊が恩寵の生へとよみがえらせられるのです。そしてそれは，この話で公に死者として，衆目の中棺で運び出される死者を公によみがえらせるという例で示されたように，罪が他の人に対する悪い例として批判されるよう，公にされる必要があるからなので，聖教会の定めるとおり，公に罪の償いをしなければなりません。

［N］さていよいよ，わたしたちの第一の目的である，第三の死体，すなわち死後四日たっていたラザロのよみがえりについて語りましょう。この話には，すばらしく，大変注目すべき点がたくさん含まれているので，一層心を集中させて想像力を駆り立て，実際にそこにいて，我らが主イエスとその弟子たちのみならず，その祝福された敬虔な家族たち，

12）原注：Of the second dede body Luce vij°：ルカ,7：11-17；Augustine, *In Johannis Evangelium Tractatus* XLIX, PL 35：1748.

すなわちマルタ，マリア，そして福音書が証言するように我らが主イエスに特に愛されたラザロとの会話に生身で加わっているかのように考えてください。[n] まずわたしたちが理解し心に留めなければならないことは，この前の章で述べた[13]，我らが主イエスが神殿奉献記念祭の折に神殿の境内に入られ，ソロモンの回廊と呼ばれる場所を歩いておられたときのことです。そのときユダヤ人たちが，飢えた狼か狂犬のようにイエスを取り囲んで，「いつまで，わたしたちに気をもませあなたが何者なのか悩ませるのか。もしキリストなら，はっきりそういいなさい」(ヨハネ, 10:24) と言いました。彼らはこれを邪な悪意に満ちた意図で，もしイエスがはっきりとキリストであると，すなわち聖別された王であると認めたならば，彼を捕らえてローマ皇帝に対する反逆者として糾弾しようと思って言ったのでした。しかし我らが主イエスは彼らの邪な思いを見抜いておられたので，賢明に表現をやわらげて，たくさんの邪悪な狼に囲まれた無垢の羊のように，静かに従順に，このように答えられました。「わたしは言ったが，あなたたちは信じない。しかしわたしが父の名によって行う業が，わたしについて証をしている」(ヨハネ, 10:25)。[N] そしてさらにこういわれました。「わたしと父とは一つである」(ヨハネ, 10:30)。彼らは，イエスが神を名乗って神を冒涜したとして，石で打ち殺そうとして石を取り上げました。

さらに我らが主イエスがその点について筋を通し，聖書の権威で反駁されると，彼らは言い返すことができず，イエスの整然とした従順な答えに太刀打ちできなかったので，その後も悪意に満ちた仕打ちを続け，増幅させていったのでした。[n] イエスの受難の時はまだ来ていませんでしたし，忍耐の範を示し，走る狂気から逃れるために，イエスは彼らの手中から身を引いて，弟子を引きつれ，ヨルダンの向こう側，洗礼者(バプテスマの)ヨハネが最初に洗礼(バプテスマ)を授けていた所，エルサレムから約18マイルの場所へ行かれ，そこにしばらく弟子たちと滞在されました。

福音書は，ちょうどこの直後にわたしたちの本題に触れています14)。前に述べたマルタとマリアの兄弟ラザロが重い病気になり，すぐにその姉妹は，前述のヨルダンの向こう側にいたイエスのもとに人をやって，「主よ，あなたの愛しておられる者，ラザロが病気なのです」と言わせました（ヨハネ, 11：3）。姉妹はそれ以上は言いませんでした。なぜならイエスは彼らを愛しておられ，伝えたいことをご存知なので，それで十分だと思ったからです。また，多分，ユダヤ人たちがイエスに対し悪意を抱き，殺そうと思っていること，最前には石で撃ち殺そうとしたことを知っていたので，彼らのもとへ呼び戻す勇気がなく，すべてイエスのご意志におまかせすることにしたのでしょう。そこでイエスは答え

13) 原注：Johannis x°; ヨハネ，10：22-31，39-40.

14) ヨハネ，11章

て，彼らに言われました。「この病気は死で終わるものではない。神への愛のためである。神の子がそれによって栄光を受けるのである」（ヨハネ，11：1-4）[15]。［N］福音書には，イエスがこれらの言葉を「彼ら」に言われたとありますが，彼らが誰を指すのかは明確でありません。イエスに人をやった姉妹はそのときそこにはいなくて，イエスからはるか遠く離れたところにいたというのですから。しかし，この話の内容から考えて，イエスが使者を通して彼女たちにこの言葉どおりお答えになった，あるいは弟子たちにおっしゃった，あるいは ― これが一番妥当と思われます ― 両者に対して言われたと考えることができます。

ああ，主よ，イエスが「この病気は死で終わらない」と言われたという言伝を聞いたとき，姉妹はどれほど慰められたことでしょう。この言葉から，彼女たちの兄弟がその病気のために肉体的に死ぬことがないのだと思ったかもしれません。しかしラザロは死に，埋葬されたので，我らが主イエスが，その後に彼をよみがえらせるという輝かしい奇跡を意味されたのだということがわからず，またそのようなことが起こるとはそのとき信じることができず，どれだけがっかりしたことでしょう。しかし，そのつかの間の悲しみは，ラザロが死なずにすみ，我らが主イエスによって病気を癒されたであろう場合よりも大きな喜びに変わったのです。

そのようなことが，神に愛されながら苦難や病にあう人々にたびたび起こります。我らが主は，彼らが請い願う安らぎをお与えになるのではなく，しばしの間，絶望をお与えになるのです。そしてその後，良いと思われるときに，彼らの願いを，彼らが初めに望んでいた以上にかなえてくださり，悲しみを，想像も思いもしなかった，より大きな喜びに変えられるのです。

さらにこの福音書の話を続けますと，我らが主イエスはラザロの病気を知らされ，先のように答えられた後，なお二日間同じ所に滞在され，それから，弟子たちに「もう一度，ユダヤに行こう」と言われました。弟子たちは，このお言葉に恐れて言いました。「先生（ラビ），ユダヤ人たちがついこの間もあなたを石で打ち殺そうとしたのに，またそこに行かれるのですか。」するとイエスは言われました。「昼間は十二時間あるではないか」（ヨハネ，11:6-9）。それはまるで「ユダヤ人たちが今でも悪意を抱いていると考えて恐れているのか。昼間の時間が流れるように，しばしば人の心と意図も様々に変化すると知らないのか」と言われているかのようでした。しかしこれらの言葉の霊的な意味は，聖アウグスティヌスが解説しているように[16]，我らが主はご自身を昼の光，12人の弟子を昼間の12時

15）原注：N

16）Augustine, *In Johannis Evangelium Tractatus* XLIX, PL 35：1749-50.

間にみなされ，彼らの信仰の薄さと，主は死ぬときをご自身でお決めになるものを，愚かにも，人が神に，弟子が師に，召使が主人に，弱く病んだ者が至上の医者に対し意見しようとしたことを非難されたのです。ですから彼らをたしなめるために，我らが主は彼らにこのように言われました。「昼間は12時間あるではないか。昼のうちに歩けば，つまずくことも，誤ることもない（ヨハネ, 11: 9)。誤りたくないなら，わたしについてきなさい。そしてわたしに助言をしようなどと思ってはならない。あなたたちこそ私の助言が必要なのだ。わたしは昼の光，あなた方は時間なのだから，自然の習いとして時間は昼の光にしたがい，昼が時間にしたがうのではない。つまづき，過ちを犯したくないのなら，わたしについてきなさい。」

この後，我らが主イエスはラザロが死んだことを霊で知り，彼らに言われました。「わたしたちの友ラザロが眠っている。しかし，わたしは彼を起こしに行く」（ヨハネ, 11: 11)。そこで弟子たちは，そのお言葉を肉的に，自然の眠りについて言われたと思い，「主よ，眠っているのであれば，よくなって助かるでしょう」と言いました（ヨハネ, 11: 12)。自然の法則では，病人が眠ることはよくなる前兆だからです。しかしイエスは，ラザロの死をそう表現されたのです。この話から，我らが主が，このように冗談めかしてお話になるほど弟子たちと打ち解けておられたことがわかります。しかし，まず神秘的に語られたことを次にはっきりと，こう言われました。[n]「ラザロは死んだのだ。彼が死んだとき，わたしがその場に居合わせなかったのは，あなたがたにとってよかった。[N]あなたがたの信仰が増し，強くなり，わたしが神の子であることを信じるようになるためである」（ヨハネ, 11:14-15)。

さてここで，福音書の記述は大幅に省略して，わたしたちの教えのために最も重要であると思われるところを拾うことにします。われらが主イエスが弟子たちとベタニアに戻られると，イエスが来られたと聞いて，マルタはすぐに出迎えに行きましたが，マリアはイエスに呼ばれるまでじっと家の中に座っていました。福音書記者聖ヨハネは，この記述，特にマルタとマリアの二人の姉妹がイエスに対して異なった振る舞いをしたことに関する描写によって，他の箇所でもしているように霊的な意味を込めていると思われます。姉妹は二つの身分，すなわち活動生活と黙想生活を示し，それぞれにふさわしい，異なる状況を示しているのです。なぜならマリアも，姉のマルタに勝るとも劣らずイエスを愛してましたし，イエスが来られたことを同様に喜び，また兄弟の死を同様に悲しみ，彼が生き返ることを同様に熱く願っていたのですから。それではなぜマリアは姉のようにイエスの出迎えに行かなかったのでしょうか[17]。これは喩えで示された例であり，観想生活にある者

17）原注：nota

は，病人や囚人を訪ねに行くとか，お腹をすかしている者に食べ物を与えたり，裸の者に服を着せたりなどといった慈愛の行い，あるいはまた説教をしたり，教えを説いたり，聖教会の聖餐式を取り仕切ったりといったことにおいても，マリアが肉体的に呼ばれたように，霊的にイエスの御名によって聖教会の命令と権威によって呼び出されない限り，身体を使ってはならないということなのです。

そうしてマリアが家の中に座っていた時，マルタは出て行ってイエスを出迎え，イエスの足もとにひれ伏し，こう言いました。「主よ，もしここにいてくださいましたら，わたしの兄弟は死ななかったでしょうに。しかし，あなたが神にお願いになることは何でも神はかなえてくださると，わたしは今でも承知しています」（ヨハネ，11:20-22）。マルタは心の内なる願いを外に表す勇気はなかったので，「さあわたしの兄弟を死からよみがえらせてください」とは言えませんでした。ラザロをよみがえらせることが適切なことなのかどうか知らなかったし，イエスがどうなさるおつもりか分からなかったので，控えめに，「主よ，あなたが兄弟をよみがえらせることがおできになることはよく承知しております。主がお望みになれば，それはなされるでしょう。でもなさるかなさらないかは，わたしの考えではなく，主の判断にお任せいたします」といった意味を込めるにとどめたのです。

するとイエスは彼女に，「あなたの兄弟は復活する」という一般的な言葉で言われました（ヨハネ，11:23）。これには二つの解釈が可能です。イエスはその時ラザロをよみがえらせるつもりなのかどうかを明確にしないことで，マルタが最終的な復活を信じているかどうか試されたのです。ですからマルタは，信仰によって，より確信している方を取り，「終わりの日の復活のときに復活することは存じております」と言いました（ヨハネ，11:24）。さらに，「わたしは復活であり，命である」とイエスがご自身について言われたこと，また「わたしを堅く信じる者はだれも，決して死ぬことはない」と言われたことを「信じるか」と主に尋ねられ，マルタは最後にこう言いました。「あなたが，人の救済のためにこの世に来られるはずの神の子，キリストであるとわたしは信じております」（ヨハネ，11:25-27）。

そしてマルタはイエスに命じられて家に帰り，静かに，すなわち小さな声で妹のマリアを呼び，「先生がいらして，あなたをお呼びです」と耳打ちしました。マリアはこれを聞くと，すぐに立ち上がり，イエスのもとへ行きました（ヨハネ，11:28-29）。さあ，ここにまた，観想生活者の務めが霊的に証しされています。すなわち，最初に沈静，そして静寂と小さな声で話すこと。決して世の一般の人のように大声をあげたり大騒ぎをしたりしないことです。さらにわれらが主イエスに呼び出されたときには，従順に，他の人を癒したり，教会運営上の管理の仕事をするために出て行くこと。そして，いかに安息を愛し，い

かに甘美な観想を愛そうとも，そのように主の絶対の命を受けたときはいつでも，マリアの例にならって，神の意思に従いすぐに立ち上がること。もしこれに従わないなら，不従順という死の罪を犯すことになります。

この福音書の話でイエスはまずマルタに会われましたが，マリアが来るまでラザロをよみがえらせることをお待ちになったということから，われらが主イエスがマリアに対しことさらの愛情と親しみを抱いておられたこともわかります。マリアは来て，イエスの足もとにひれ伏し，激しく泣いて，姉が言ったように，もしイエスがそこにいたなら，兄弟は死ななかったでしょうにと言いました。イエスは，特に愛情をかけているマリアが泣き，またそのときマリアを慰めるためにやってきていたユダヤ人たちも泣いているのを見て，一緒に泣かれました。それは三つの理由からでした。第一に，イエスが特にマリア，そしてその姉とラザロを愛しておられたからでした。第二に，死後四日たって埋葬もすんだラザロに証しされている常習的な罪と，そのことによる霊的な死が嘆かわしいということを示すためでした。そして第三に，居合わせた人々がイエスを信じていないこと — イエスが，死なないように助けてくださるということは信じても，死んだ者をよみがえらせることができるとは信じていないことを悲しまれたからでした。[n]

[18] ここで心の力を集中させて，われらが主イエスが，姉妹が，ユダヤ人たちが，そう，そして弟子たちが泣いているさまを心に見ることができるなら，誰でも同情の心をかきたてられて，少なくとも心の中で一緒に泣き，常習的な罪を嘆くでしょう。われらが主イエスが激しく泣かれ，興奮された様子，そしてラザロをよみがえらせる前に二度にわたって怒り，心の憤りを示されたことによって霊的に示し教えてくださったように[19]，常習的な罪は，克服することも，抜け出ることも大変難しいのです。このラザロが常習的な罪を象徴しているということはよく指摘されていますが，たとえば聖アウグスティヌスは，このようにたとえています[20]。「死の罪という重い石に押しつぶされているあなたは，怒り，憤りを覚え，このように心を乱しなさい。自分が罪深いことを認め，永遠の死にふさわしい罪を何度犯したか考えなさい。そして何度，神の限りない慈悲があなたの罪を許し，見逃してくださったかを。あなたは福音書が罪を禁じるのを何度聞きましたか。あなたは，これを無視して，最初の洗礼に背く誤った行いを続け，ようやくその罪を後悔してこのように心に問うのです。『何をしたらいいだろう。これからどうしよう。どうすればこの大変な罪を逃れ，終りのない死という恐ろしい危機を逃れられるだろう』と。あなたがこの

18) 原注：lacrima［涙］；Augustine, *In Johannis Evangelium Tractatus* XLIX, PL 35：1755.
19) ヨハネ，11：33，38.
20) 原注：Augustinus；*In Johannis Evangelium* XLIX, PL 35 : 1755. この段落最後まで

ように心で言うとき，実はキリストがあなたの中で憤っておられるのです。信仰は憤るからです。そしてもしわたしたちに信仰があるなら，それはわたしたちの中にキリストがおられるということなのです。そしてこのように不平を言うことにこそ，再生への希望があるのです。なぜなら，福音書の伝えるところによれば，このように泣いて興奮した後，われらが主イエスは，どこにラザロを葬ったのかとお尋ねになられたからです。ご存じなかったからではなく，そのとき死の罪に押しつぶされていた人々にわかるよう，人の言葉で，人には計り知れぬ神の慈愛を霊的に示されるためでした。しかし主は，常に罪深い者に対し同情深く，主の慈悲は心から望む者すべてにいつも用意されています。このときも，『どこに葬ったのか』とお尋ねになったので，『主よ，来て，ご覧ください』と答えますと，イエスは涙を流されたので，そこにいたユダヤ人たちは，『御覧なさい，どんなにラザロを愛しておられたことか』と言ったのです（ヨハネ, 11:34-36)。こうして主は，罪深い者に対する愛の深さを示されました。福音書で言っておられるではありませんか，『わたしが来たのは，正しい人を招くためではなく，罪びとを招いて悔い改めさせるためである』(ルカ, 5：32；マタイ, 9：13，マルコ, 2：17）と。」

ともあれ，わたしたちは，主の一行すなわち二人の姉妹マルタ，マリアと，弟子たちと，そのとき姉妹を慰めるためにそこにいた大勢のユダヤ人たちと一緒にわれらが主イエスに従い，ラザロの墓へと参りましょう。われらが主は，彼らがこの荘厳な尊い奇跡を目撃して，その証人となることを望まれました。わたしたちも敬虔に心を傾けて想像しましょう。われらが主イエスは，姉妹の間に入られて親しく言葉をおかけになり，姉妹もまた兄弟を亡くした悲しみの思いの丈を打ち明けます。姉妹は，ユダヤ人たちがイエスを陥(おとしい)れて殺そうとたくらんでいたことを知っていたので，イエスに，来て兄弟が死なずにすむよう助けてくださいとお願いすることができなかったのでなおいっそうのこと，今，主の尊いお姿に強く慰められるのでした。とはいえ，同時に，ユダヤ人たちのことが恐ろしくてしかたありません。するとわれらが主イエスは，お優しく，ふたたび姉妹を慰めて，恐れることはない，全てが良いようになるから，そしてそれは父の御心であると，言われました。そうして語り合いながら墓まで来られると，墓は大きな石で蓋をされていましたので，われらが主イエスは，「その石を取りのけなさい」と言われました。姉妹はイエスを心からお慕いしておりましたので，死体の恐ろしい様子や腐臭をイエスが嫌悪なさるだろうと恐れ，とまどって，「主よ，四日もたっていますから，もう臭います」と言いました。それは，兄弟が生き返るなどという望みを姉妹が持っていないことを示していました。しかし，われらが主は，逆に，姉妹に強く信じるように言われ，石を取りのけさせました。そして，天を仰いで言われました。「父よ，わたしの願いを聞き入れてくださって感謝します。わ

たしの願いをいつも聞いてくださることを，わたしは知っています。しかし，わたしがこう言うのは，周りにいる群衆のためです。あなたがわたしをお遣わしになったことを，彼らに信じさせるためです。」こう言ってから，「ラザロ，出て来なさい」と大声で叫ばれました（ヨハネ, 11:38-43)。

ああ，主イエスよ，どうしてお泣きにならなければならなかったのですか。それは，まさしく，聖アウグスティヌスが指摘するように[21]，常習的に死の罪という石に押しつぶされている者にとって，霊的な生命によみがえることがどれだけ困難なことかを，霊的にお示しになるためでした。

そこにいた人のうち，悪習という重荷に押しつぶされている人が何人いただろうかと聖アウグスティヌスは問いかけています。今わたしの話を聴いている人たちの中にも，姦淫，あるいは大食の罪に負けている人がいるかもしれません。使徒が[22]こう嗜(たしな)めています。「酒に酔いしれてはなりません。それは身を持ち崩すもとです」(エフェソの信徒への手紙，5:18)[23]。してはならないと，使徒が繰り返し言っています。そしてさらに，神と聖教会が禁じているその他の大きな過ちや間違った行いについても。ところが，「これこれをしてはならない。さもなければ破滅する」と言われても，そうした族(やから)は，「とてもやめられません」と答えるのです。

[24] ああ，主イエスよ，この人たちを，ラザロのようによみがえらせてください。あなたこそ，おっしゃるとおり，復活・再生であり，生命であられるからです。

[25] 悪習というこの石は，なんと重く，あらゆる階層の人々にのしかかっていることでしょうか。学ある者もない者も，神に帰依した者も，ほとんど全ての身分の人々にあてはまります。その悪習を批判する者ならば，経験から，イエスより他に薬はないということをよく知っているはずです。

ああ，主イエスよ，これらのすべての人々のために，大声で叫んでください。そしてあなたの力を示し，悪習という重い石を取りのぞき，ラザロを立ち上がらせたように，彼らを恩寵の生へとよみがえらせてください。あなたが大声で命令されたので，ラザロは立ち上がり，墓から出てきたのですから。しかしラザロは，弟子たちがあなたの命令で解(ほど)いて自由にしてやるまで，手と足を布で巻かれたままでした。

21）原注：Augustinus
22）パウロ
23）原注：Nolite inebriari vino, etc.［酒に酔いしれてはならない］
24）原注：Augustinus
25）原注：N［ラヴの加筆］

[26] 聖アウグスティヌスが指摘しているように，このように足を巻かれたままで墓から出てくることができたということを，多くの人が大変不思議に思っています。しかしさらに不思議なことは，埋葬後四日もたって，死臭を放っていた者が死からよみがえったということです。これは何の証なのかと，聖アウグスティヌスは問います。それは，このようなことに他なりません。あなたが掟を侮り大罪を犯したとき，あなたは霊的に死ぬのですが，その過ちを常習的に続けた場合，あなたは死んで埋葬されていると言えるのです。そして，もし罪を悔いて懺悔し，公に罪を認めたなら，そのときあなたは立ち上がり，あなたの墓から出てくるのです。「出て来なさい」と言うことは，あなたの罪，つまり外に対して秘めていることを，外に示して公にしなさいということに他ならないのです。こうして罪を認め，示すことによってのみ，神は大声で叫ばれる，すなわち偉大な恩寵の声をおかけくださるのです。

ただ，死者が生き返り，墓から出てきたとはいえ，彼は布で巻かれたままでした。すなわち，神が「あなたが地上で解くことは，天上でも解かれる」と言って（マタイ，16:19）力を唯一お宅しになった代行者の手で，解(ほど)き自由にしてもらうまで，罪は晴れないということです。すべて，アウグスティヌスの訓話に書いてあります。

[27] ここにわたしたちは，誰でも心の中で神に懺悔するだけで十分なのであり，聖教会の司祭たちには，一般人と異なる，罪を赦免する力などない，罪を許すことができるのは神のみであり，神の名を語るその他何者でもないなどと間違ったことを言って，聖教会によって定められた告解を否定し，司祭を攻撃する族(やから)に対する十分な反論の根拠をはっきりと見ることができます。

しかしここでは，そうした間違った意見についてはこれ以上触れないことにして，先ほどの話の終りへと進むことにしましょう。ラザロがわれらが主イエスによってよみがえらせられ，その後弟子たちによって布を解(ほど)いてもらうと，ラザロと姉妹は大喜びで，イエスにその至上の善行に対し深く感謝の礼をして，朗らかに自宅へとお連れしました[28]。このときそこに居合わせたユダヤ人たちはこの偉大な奇跡に大変驚き，イエスを信じるようになった者もいたのですが，ファリサイ派の人々のもとへ行き，イエスのなさったことを告げる者もあり，そうして奇跡は多くの人が知るところとなりました。そして大群衆が，エルサレムやその周辺から，よみがえったラザロを見にやってきたので，ユダヤの祭司長たち[29]

26）原注：Augustinus, huc; *In Johannis Evangelium* XLIX, cols. 1756-57.
27）原注：N
28）原注：B
29）原文：princes

やファリサイ派の人々は，すっかり混乱して，ラザロをも殺そうと謀りました。多くのユダヤ人がラザロのことで改宗し，イエスを信じるようになったからでした（ヨハネ，12：9－11）。

30) [N] さて，これまでの，われらが主イエスが死者の中からよみがえらせた三人の者についての話をまとめ，聖アウグスティヌスはこのように言っています。[n]「兄弟たちよ，話はこれで終わりです。霊的な生活を送る者は，恩寵の生活を続けることができるのです。死者よ，彼らのように立ち上がり，よみがえれ。まず，心で死の罪に応じたが実行はしなかったために運び出されていない者は，その思いを悔いて，よみがえりなさい。その者は，良心という家の中で死んでいたのです。そして心に抱いた死の罪を実行してしまった者も，絶望してはなりません。中でよみがえることはできないものの，外で立ち上がりなさい。埋葬されて，悪習という重い石で蓋をされることがないように。しかしむしろ，わたしが語り掛けたいのは，罪深い生き方という重い石に蓋をされ，習慣という重みに身動きできず，そうして死後四日たって死臭を放っているような者でありましょう。その者も，絶望するには及びません。死んで葬られてはいるのですが，イエス・キリストの力は偉大であり，地上のあらゆる重荷を打ち破ることがおできになるのです。イエスは，大恩寵を大声で叫び，死者をよみがえらせる。まずはご自身が中で立ち上がらせ，次に弟子たちのもとへ連れてゆき，巻いてあるものを解(ほど)かせ，そうして彼を霊的に完全に再生なさるので，よみがえった者の魂には，ラザロの場合と同様に，もはや罪の死臭の痕跡もないのです。主が，救いを必要とするすべての者に，その恩寵を賜りますように。」イエス・キリストよ，アーメン。

[ボナヴエントゥラ，『キリストの生涯についての黙想』第二章がここに終わる]

第三十五章　ユダヤ人たちが相談し，イエスを殺す計画を立てたこと

31) [N] 前述のラザロを生き返らせた奇跡の後，[n] われらが主イエスが尊い血を流されることによってわたしたちの救済を働かれるべき時が近づいてきました。嫉妬の父，悪魔が，その騎士たちと従者たちを武装し，われらが主イエスに対する敵意をつのらせ，殺してしまうように仕向けました。イエスが良い，徳高い行いをされた折にはことさらに，そしてまた，とりわけラザロの復活から火がついた嫉妬がいや増しに強まって，イエスに対して何らかの行動に出ないことには，もはや狂気を抑えることができなくなってきまし

30) 原注：N, Conclusio Augsutini; Augustine, *In Johannis Evangelium Tractatus* XLIX, PL 35：1755-56.

31) 原注：N.B.

た。そこで祭司長たちとファリサイ派の人々はイエスを糾弾する会議を招集しました。その席上で，その年の大祭司であったカイファはイエスを貶(おとし)めようとしたのですが，彼が言ったことは，いみじくも，イエスが人類の救済のために死ぬということを予言したことになったのでした。(ヨハネ, 11:47-52)

[32] [N] これは，神の責めを負う邪悪な者も，時に予言という賜物を授かっていることがあるという例のひとつです。

こうしてそれらの悪い祭司長たちとファリサイ派の人々は，その会議で，満場一致により，その無垢の子羊イエスを殺すことを決議したのでした[33]。それは，すべての人々がイエスを信じるようになったり，ローマ人たちがユダヤの法を覆し，やって来て彼らの神殿と民を破壊することがないようにと考えた結果でした。

ああ，愚か者よ，愚かな考えよ。「どのような英知も，勧めも主の御前には無に等しい」[34]と知恵者について書いたのではなかったのか。おまえたちの邪悪なたくらみ，そして実行された悪行は，まったく逆効果となったのである。おまえたちは，ローマ人たちがお前たちの国と民を破壊しないようにとイエスを殺したが，その後まったく予期に反する結果となり，お前たちがイエスを殺したために，おまえたちの国と民とはローマ人たちによって滅ぼされたのだということは，ティトゥスとウェスパシアヌスによるエルサレム陥落の話でよく知られているとおりである[35]。

[36] 同様に，この世で知恵とみなされることが神の前では正反対であるということが往々にしてあります。われらが主なる神は，地上では最悪のことであり，最悪の状態になるとみなされることを，しばしば最善の結果へとお変えになるからです。特にこの世の知恵の目的が嫉妬に根ざしている場合は，ヨセフについての著名な話につまびらかです。ヨセフの兄たちは，ヨセフに嫉妬し，特に彼の夢の予言の後はとても彼を大事にする気持ちになれなかったので，彼を厄介払いするためにエジプトに売り渡しました。この世の知恵をめぐらせたはずでしたが，その後，神の恩寵によってまったく反対の結果となり，ヨセフをエジプトに売ったことは，ヨセフが高い地位に登りつめ，兄たちがヨセフにひれ伏して崇めることのきっかけ，原因となりました[37]。似たようなことが日々おこっていることは，

32) 原注：N

33) Cf. ヨハネ, 11:53; イエスを殺す計画はマタイ, 26: 1-5，マルコ, 14: 1-2，ルカ, 22: 1-2も参照。

34) 原注：prouerbium 21; 引用は箴言, 21:30.

35) Titus（ローマ皇帝：79-81）とVespasianus（ローマ皇帝：69-79）によるエルサレム陥落の話は詩や散文によって中世に広く知られていた。Cf. *The Siege of Jerusalem.*

36) 原注：Notabile

37) 創世記，37，39-47章。

この世の移り変わりの中で，わたしたちがこの目で見て実際に経験しているとおりです。[n]

[38] しかしながら，ここではこの話はこれくらいにして当初の目的に戻り，先ほどの間違った，嫉妬に根ざす計画について考えましょう。われらが主イエスは，天にいます父なる神の永遠の知恵であられます。神にはどんな隠し事もできないのですから，イエスはユダヤ人たちがイエスに対してこのように陰謀をたくらんでいることをご存知でした。人類の救済のために死ぬと定められた時はまだ満ちておらず，また直前の章での模範を示すために，彼らの悪事から逃れて，一箇所にとどまることで敵意を増長させることがないよう，ユダヤ人のもとを去って荒れ野に近い地方のエフライムという町に行き，[N] 弟子たちとしばらくそこに滞在されました（ヨハネ，11:54)。しばらくというのは，七夜です。学者の意見では，イエスがラザロを生き返らせたのが受難の主日[39] の直前の金曜日であり — その日には福音書のこの箇所が聖教会で読まれます — 七夜後の土曜日に，次の話に明らかなように，ベタニアに戻っておられたからです。[n]

第三十六章　過越祭の前の土曜日にわれらが主イエスがベタニアに戻られたこと。そこでイエスのために用意された夕食と，そこで起こったことについて

[40] [N] 全ての徳の至上の権威であり師であるわれらが主イエスは，言葉によってのみならず，行いで示すことで教えを広められました。[n][41] 前の話では，わたしたちを教え導くために，敵から逃れることで，慎重という徳を用いられ[42]，このことによって，わたしたちも，時と場合により，わたしたちを悪意で追いかける者たちの狂気からは逃れることが懸命であるということを示されました。そして今，主の自由意志により御身を受難に捧げるべき時が満ち，敵の中に戻るという行為において，霊の力という[43] 徳を用いられました。追っ手の悪意を強く，激しく，その行き着くところ，すなわち激烈な死まで，甘受しようというのです。

同じように，また別の折に，人々がイエスを王にしたいと思ったとき，世間の崇拝を避けて身を隠され，節度という徳を用いられました[44]。正義を用いられたこともあります[45]。

38）原注：processus
39）Passion Sunday：Lent（四旬節：Ash WednesdayからEasterまで）の第5日曜日。
40）原注：N
41）原注：B
42）原注：prudencia
43）原注：fortitudo
44）原注：temperancia
45）原注：justicia

この後の話にあるように，イエスご自身が民の王として崇められることをお望みなったときのことで，そのとき人々は木の枝を持って迎えに出るなど，さまざまな方法でイエスに栄光を捧げ，エルサレムの町にお迎えしました。（ヨハネ，12:12-15，マルコ，11：8 -10，ルカ，17:36）

［N］さらに尊くは，イエスはこの正義の徳を，神殿に入られてから用いられ，ユダヤ法の司祭たちやファリサイ派の人々の過(あやま)った貪欲を激しく責め，神の家で売り買いをしていた人々を大変な剣幕で追い出されました。（マタイ，21:12，マルコ，11:15，ルカ，19:45；ヨハネ，2 :14-16）［n］

こうして主は，美徳の中でも，これら四つの主要な基本徳目 ― 慎重，節度，精神力，正義 ― を用いて，わたしたちに徳について教え，お示しくださったのです。

ですから，主の言動がばらばらであるとか，一貫性がないとか思われることがないように，以上の美徳以外の徳を用いられた場合は割愛します。しばしば賢い選択というものが必要なものです。この話はこれくらいで，われらが主イエスが，定めの時に，世に対して受難に御身を捧げるため，ベタニアに戻られた話を続けましょう。それは過越祭の直前の日曜日のことで，エルサレムにほど近い，およそ2マイルほどのところでした。そこで，イエスと親しい真の友人たちが，主の再来を心から喜び，らい病の人シモンの家でイエスに夕食を用意しました。［N］らい病の人シモンという名前は，かつてらい病を患っていたからで，そのときも病気であったということではありません。［n］彼はイエスにその病気を癒していただいたのですから。そしてその夕食にはイエスの親しい客たち，すなわちラザロ，マルタと妹マリアもおりました。［N］そしてヨハネが特筆しているところでは，マルタが給仕をし，ラザロが他の客と一緒にわれらが主と食卓を囲んでおり，［n］そして，マリアは，イエスに対する愛に燃え，聖霊の内なる導きを受けて，非常に高価な香油を持って来てイエスの頭に注ぎ（マルコ，14：3），足に塗ったので，［N］家はその高価な香油の甘い香りで満たされました。（ヨハネ，12：1-3）

[46] さて，ここにしばし留まって，先ほどの注意点について心を傾けましょう。まず，われらが主イエスは，なぜ，よりによって，すでに申し上げましたとおりファリサイ派の人であるそのシモンの家で夕食をしようとされたのでしょうか。他ならぬその家で，マリアは以前もイエスに高価な香油を注ぎ，心のうちの悲しみと，悔悟の苦い涙を注いだのですが，今，より完璧に，言葉にできない喜びと，献身の甘くとろける涙を注いだのです。われらが主はそうなることを良くご承知で，それだからこそ，この場所をそのときに，特

46）原注：N

にマリアのためにお選びになったのだと考えてよいでしょう。マリアが，前に述べましたとおり，彼女の大きな罪に対する神の許しの恩寵を初めて知ったその場所を特に大切に思っていたことは間違いなく，だからこそ，その場所で，イエスに対する燃える愛を示して，その卓越した献身の行いをすることが好ましかったのです。

イエスがシモンの家で夕食を召し上がろうと思われたのは，シモンが，以前マリアのことで遠慮なく叱責されたにもかかわらず，変わらぬ慈愛とまことの愛情をイエスとその弟子たちに対して持ちつづけていることをご存知だったからでもありますが，ラザロが本当に生き返ったのだということをはっきりと証しするためでもありました。ラザロはそのファリサイ派の人の家で，堂々と，そしてそのときイエス御自身を見るためばかりでなく，ヨハネが特筆しているように，ラザロを見るためにそこに来ていた大勢のユダヤ人の目の前で，食べたり飲んだりして見せたのです。

ですからその晩餐に，その家の中で，これらの四人の人がそれぞれに，われらが主イエスに心からお仕えしている様子を見ることができます。その家の主人は，慈愛を込めたもてなしで。ラザロはイエスがまことに神であられることを公けに証しする者として。マルタは，真の活動生活にふさわしく，忙しく立ち働き，マリアは，崇高な観想生活にふさわしい，燃える愛と献身的な崇拝によって主にお仕えしていたのでした。[n]

しかしその一方で，反対の，嫉妬，貪欲，悪意によって，われらが主イエスの怒りを買うような行いも見ることができます。たとえば嫉妬深いユダは，忌むべき貪欲をごまかそうとして，そのような高価な香油にたくさんの金を費やしたのは無駄遣いだとなじり，その金で貧しい人に手を差し伸べたらよいのにと偽善的に，「それを300ペンスで売って，困っている人に施せばよかったのに」と言いました（ヨハネ，12：5）。そこでこれを聞いていた人も，ユダが貧しい人々に対する心からの善意で言ったのだと思って心動かされ，そのような高価な香油は無駄遣いであると，マリアに対して不満を言い，怒りました（マルコ，14：4-5）。マリアは黙っておりましたが，われらが主が，それまでにも二度なさったように，彼女に代わってお答えになり，今度はその者たちを戒めて，マリアが良いことをしたことを明言し，「前もってわたしの体に香油を注ぎ，この先の埋葬の準備をしてくれたのだ。このことは，語り伝えられるべきことである」と言われたのです（マルコ，14：8-9）。

ああ，主イエスよ，ご自分の死をこのようにはっきりと宣言なさるのを聞いて，とりわけマリア，またそこにいた他の真の友人たち，そして誰よりも，尊い母は，どれほど悲しみ，心乱したことでしょう。まちがいなくその言葉は，どんな剣よりも鋭く，母の心を貫きました。そうして祭りの陽気さは悲しみへと一転したのです。というのも，ユダヤ人た

ちがイエスを殺す計画を発表したことを知っていたからでした。その中で反逆者ユダは嫉妬による怒りをますます募らせて，イエスを裏切り，引き渡す機会をねらっていました(マタイ，26:14-16，マルコ，14:10-11，ルカ，22: 3-6)。そして次の水曜日に30ペンス[47]でイエスを売ったのです。このことについては後で語りましょう。

[48] [N] さらにここで，特にわたしたちの目的にそって特筆するならば，教会に対して義援の献金やその他の敬虔な行いなどの贈り物をすることは愚行である，貧しい人たちに与えることが必要であり，より良いと言って批判する人たちはユダの仲間です。

おお，ユダよ，口先では貧しい人を助けるような振りをしても，真意は聖教会の人々に対する嫉妬に根ざし，貧しい人に味方するどころか，自分自身の貪欲から，献身の心もなければ自分自身の物を分け与えようという気持ちもない自分の欲深さを正当化しようとしているのだけだ。ユダのような者はみな共通して，他の人と同様，いやそれ以上に欲深いということを経験が物語っていますし，そのような人と何らかのかたちでかかわる人は誰でも，それを実際に目撃するでしょう。

福音書のあちこちで，特にここから受難に向けて，われらが主イエスは，律法学者たちやファリサイ派の人々を，とりわけ欲深さについて，度々激しく批判しておられます。しかしだからといって，彼らに対し，お金やお供えやその他の献身の贈り物をすることを一度たりとも禁じてはおられず，むしろ掟に従って常に義務を果たすように命じ，マルコとルカの福音書にはっきり示されているように，惜しみなく献金する献身をほめたたえておられます[49]。その話によれば，われらが主イエスは，金持ちが神殿への贈り物や捧げ物を，宝庫，あるいは金庫と呼ばれる容器の中に入れるのを見ておられました（それは現在教会で使われている慈善箱のように，上に穴の開いた容器で，ゴザフィラキウムと呼ばれるものでした)。その中に，ある貧しいやもめが小銭を二枚[50]奉じるのをごらんになりました。それは1シェケル[51]の四分の一で，彼女の生活費のすべてでした。われらが主イエスは，それを批判されるどころか称えて，そのやもめの偉大な信心を褒め，神の目には，彼女の小さな贈り物は金持ちの多額の献金すべてにまさるとおっしゃったのです。

ここで，この状況に十分に注意を払うならば，われらが主イエスのこの話，教訓だけでも，ユダとその仲間が，前に述べた，聖教会に対する彼らの誤まった意見と教えのために

47) ヨハネ，26：15参照：「彼らは銀貨30枚を支払うことにした。」
48) 原注：nota contra lollardos
49) 原注：Marci 12, Luce 21; マルコ，12：41-44，ルカ，21: 1 -4.
50) マルコ，12:42，ルカ，21: 2 ：「レプトン銅貨2枚」
51) イスラエルの通貨単位

十分に批判され，否定されたことがわかります。

しかし，この話はここまでにして，ベタニアに戻り，われらが主イエスがシモンの家での夕食の後，ラザロとその姉妹と一緒に彼らの家へ行かれたときの様子を想像しましょう。それは彼らの共同の住まいで，主は受難にいたるまでの数日間をそこで過ごされました。イエスは弟子たちと一緒にそこで食事をされ，そこで眠られたのです。また尊い母君も姉妹とご一緒で，だれもが聖母さまにふさわしい敬意を払いましたが，特にマグダラはおそばを離れようとはしませんでした。

そのとき，われらが主イエスは，それらの真の友たちが，これから起ころうとしている未知のことで，あまりに衝撃を受け心を乱しすぎることがないように，翌日堂々とエルサレムに入るとお告げになりました。聖母さまはもちろんのこと，みな大変恐れて，自ら敵の手中に入るようなこと，いわんや，その上ユダヤ人たちがイエスに対して確実に仕組んでくるはずの死のわなに自らかかっていくようなことをしないでくださいと心から頼みました。しかし，われらが善き主は，逆にみんなを慰めて，恐れることはないと命じ，こう言われました。「わたしが行くのは父の心なのだ。だから父がわたしたちをお守りくださる。そして今わたしが敵の中に入り，これまでにない崇拝を受け，敵がわたしに対して何の力も持たないことをあなたたちが見ることを定めておられる。することをすべて終えたなら，明日の夕べにはまたここに，みな無事帰ってくる。」これを聞いて，全員慰められたのですが，しかし恐れを払拭することはできませんでした。[n]

第三十七章　過越祭の日にイエスがエルサレムに入られたときのこと（マタイ，21：1-11，マルコ，11：1-11，ルカ，19:28-40，ヨハネ，12:12-19）

[52] 翌日の日曜日朝早く，われらが主イエスは，言われたとおり，新しい，未知の，今までにない方法でエルサレムに入られました。それは預言者ゼカリヤの予言を成就させるためでした[53]。そして一握りの，しかし祝福された仲間と，途中のベトファゲと呼ばれるところに来たとき，イエスは二人の弟子をエルサレムに送り，道端につないである雌ろばとその子ろばを連れてくるように，また自分のろばがなくて困っている貧しい人がいれば，手を貸してやるようお命じになりました。そしてろばを引いて来て，弟子たちがその上に服をかけると，われらが主イエスは従順にまずしばらく雌ろばにお乗りになり，それから

52) 原注：B

53) ヨハネ，21：4-5；ゼカリヤ書，9：9：「娘シオンよ，大いに踊れ。娘エルサレムよ，歓呼の声をあげよ。見よ，あなたの王が来る。彼は神に従い，勝利を与えられた者　高ぶることなく，ろばに乗ってくる　雌ろばの子であるろばに乗って。」

子ろばにお乗りになり，その質素ないでたちでエルサレムへと入って行かれました。

ああ，主イエスよ，王の王であり，この世の主であらせられるあなたが，そのような様子で，それも荘厳なエルサレムの町に入っていかれるとは，なんという光景であったことでしょうか。しかし，まことに，これも他の事と同様に，わたしたちに教え，手本を示すためにされたのです。なぜなら，黄金の馬具，手の込んだ鞍やくつわの代わりに，質素な服と麻紐の端綱（はづな）といったいでたちで世の栄光をお受けになったご様子から，あなたがこの世の虚栄をすべからく徹底的に軽蔑されることを見，理解することができるからです。

すると人々は，ラザロを生き返らせたあの偉大な奇跡について聞き知っていたので，イエスが来られると聞いて，イエスのもとに集まって賛美歌を歌い，イエスの行く道に自分の服を敷き，また木の枝を敷き，喜び，お迎えしました。しかしわれらが主イエスは，この喜びに悲しみと涙をお混ぜになりました。エルサレムの町に近づいたとき，その町が後に破壊されることを思って涙を流され，人々が霊的に盲目であることを悲しまれたからです。われらが主は三回泣かれたと聖書に特筆されていることを心に刻んでください[54]。一度はラザロが死んだときで，原罪のために死ななければならないという人類のみじめさのためでした。またイエスは，今回のようにエルサレムの町に住む人々の場合ような霊的な盲目さ，無知のために泣かれました。エルサレムの人々は，恩寵の訪れの時を認めようとせず，その結果，あとでエルサレムが完全に滅亡することになるからです。三度目にイエスは，人の罪と悪のために泣かれました。それは十字架に架かられた受難の時でした。なぜならイエスは，御自分の受難が全人類の救済に十分であるとご存知ではあったものの，全ての人にその効果を期待できないからでした。罪を悔い改めようとしない，悪い，かたくなな，罪の償いをしようとしない心には，効力がないからです。このときに泣かれたことについて，使徒パウロは，イエスが受難のときに「激しい叫び声をあげ，涙を流し」，「その畏れ敬う態度のゆえに聞き入れられ」たと記しています（ヘブライ人への手紙,5：7）。聖書は，そのように，これら三度のイエスの涙について語っています。

[55] また聖教会は，イエスが四度目に泣かれたことにも注意を喚起していますが，それはイエスの子供時代のことで，イエスの受肉の神秘を悪魔から隠すために泣かれたのでした。

ご覧なさい。今，われらが主イエスが泣いておられます。うわべだけの涙ではありません。本当に，そして激しく，心から悲しくて泣いておられます。イスラエルの人とその町のこの世での滅亡もさることながら，特に，終りのない地獄での破滅を嘆いておられます。

54）原注：nota Jesum qualiter fleuisse［イエスが泣かれたことに注意］

55）原注：4

そしてイエスの大切な母と祝福された仲間たち全てが，イエスが泣かれるのを見て，がまんできずに一緒に泣いていると思って間違いありません。ですから，わたしたちも霊が失われるの見るときは，涙を抑えなくて良いのです。

このようにわれらが主イエスは，ろばの背に乗り，王侯を従える代わりに貧しく質素な弟子たちを従えて，母とその他の敬虔な婦人たちを従えて，その荘厳な町に入られ，[N] 人々が，先に述べたようにイエスを称えました [n]。イエスの到来によって都は大騒ぎになりました。イエスはまず神殿に行かれ，そこから，[N]三十二章で述べましたように，[n] 神の掟に反して物を売り買いする人たちを追い出されました。そしてその神殿に堂々と立ち，祭司長やファリサイ派の人々に説教をし，問答をして，夕方まで一日中おられました。そうしてイエスと人々は一日中飲食もせず立ったままでした。大歓迎をしてお迎えした後，誰一人，一度として，水一杯をイエスに要求した者もなかったのです。そうして夕刻には，イエスは弟子たちと一緒にベタニアの粗末な宿へと戻られました。その朝あれほどの栄光を受けたのとは対照的に，その少しばかりのお供と一緒に，つつましく都を出て行かれたのでした。

[56] ここで，そのようにすぐに与えられ，また簡単に消えてしまうようなこの世の栄光はほとんど意に介する価値がないとわかります。しかしイエスの母やマグダラ，またその他の真の友たちが，イエスがそのように人々から称えられるのを見て，特に，夜，無事目的を達してベタニアに着いたとき，どれだけ喜んだでしょうか。[N] それは，われらが主イエスのみがご存知です。主に永遠の栄光あれ。アーメン。[n]

56) 原注：nota